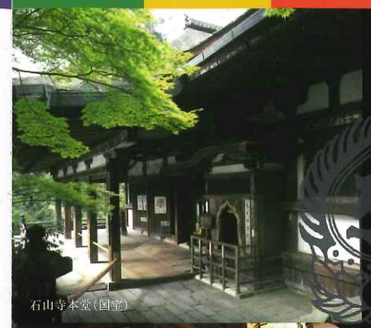
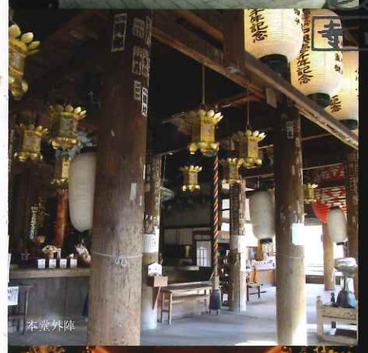
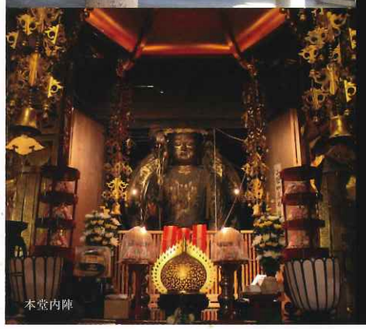
勅封秘仏 御本尊 如意輪観世音菩薩（重要文化財） 特別拝観


石山寺本堂（国宝）


本堂外陣


本堂内陣

御本尊如意輪観世音菩薩

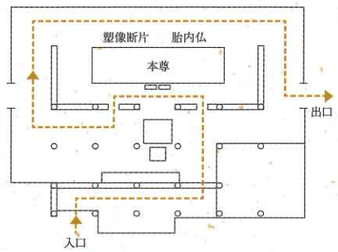
三十三年に一度 および 新天皇即位の翌年にのみ 開かれる勅封秘仏

石山寺の本尊は、普段は何人たりとも見ることのできない秘仏であり、厨子の前には代わりに「御前立尊」が安置されています。その扉は三十三年に一度および天皇陛下の御即位の翌年にのみ開かれ、平成二八年（二〇一六）には三十三年に一度の本尊観世音の御開扉を行いました。「三十三」という数字は「観音経」に説かれる「観世音菩薩は三十三の姿に変化して人々を救う」という記述にちなむものです。

この度令和二年（二〇二〇）には、天皇陛下の御即位を祝して勅封御本尊の御開扉を行います。開封式の法要には勅使の立ち会いの下、厳粛に御扉が開かれます。古来より人々の信仰を集める御本尊如意輪観世音菩薩は、作品としても重要文化財に指定されており、永長元年（一〇九六）に造立された優品です。

一丈六尺（約五メートル）の巨大な像でありながら、その穏やかで優美な姿は「慈悲の仏」というにふさわしく、円満な表情で衆生を見守っています。

特別公開 本堂内陣



<勅封>勅命（天皇の命令）により封印されることをいいます。

「石山寺縁起絵巻」に記された歴史と観音像

「石山寺縁起絵巻」によると、石山寺は天平十九年（七四七）、聖武天皇の勅願により良弁僧正が創建されました。聖武天皇は東大寺盧舎那仏の体を荘厳する金の産出の祈願を良弁僧正に命じました。良弁僧正がその言葉のとおり石山の地で岩の上に観音像を置き祈願したところ、陸奥の国から黄金が産出され、無事に大仏の体を荘厳することができました。その際、岩の上から観音像が離れなくなり、そこに草案を建てたのが石山寺のはじまりと縁起絵巻は伝えています。硅灰石の岩塊からなる石山は、まさに観音のおわす補陀落山そのものだったのです。

石山寺縁起絵巻 巻第一
（重要文化財、鎌倉時代）

蔵王権現 執金剛神 二柱の脇侍

御本尊 如意輪観音菩薩の脇侍は、蔵王権現・執金剛神の二柱です。良弁僧正が東大寺で信仰していた執金剛神、良弁僧正に夢告を与えた吉野の蔵王権現という、石山寺にとって重要な仏さまが観音の両脇に安置されています。元本尊の脇侍であった蔵王権現像の心木（重要文化財）も、内陣で公開しています。

金剛蔵王立像心木
（重要文化財、奈良時代）

本堂内陣 特別拝観

本尊 胎内仏（重要文化財）

平成十四年に発見された最古級の飛鳥仏など四軀

平成十四年（二〇〇二）八月、奈良国立博物館の調査により、秘仏御本尊の胎内から四軀の金銅仏および水晶製五輪塔が発見されました。飛鳥時代から天平時代までの貴重なお像であり、このうち飛鳥仏は日本製としては最古級といわれています。仏像を納めていた木製の厨子の墨書によると、四軀の金銅仏は「古像」（承暦二年（一〇七八）本堂火災により罹災した塑像の本尊）の像内に納められていたもので、うち二軀は「往古の霊像」（聖徳太子二生の御本尊）と思われること、寛元三年（一二四五）にこの像を修理し終わったため安置したことなどが書かれています。このことから、これらが鎌倉時代に補修され、胎内に納入されたことがわかります。

◆如来立像 像高26.2cm 飛鳥時代（七世紀）
◆観世菩薩 像高30.3cm 飛鳥時代（七世紀）
◆観世菩薩 像高21.3cm 飛鳥時代（七世紀）
◆観世菩薩 像高28.4cm 天平時代（八世紀）

四軀の仏像のうち、一軀は如来像、他三軀は菩薩像であり、三軀の菩薩像は「観世菩薩」と名付けられました。これは、『正倉院文書』において石山寺の本尊を「観世菩薩」としていることにちなみ名付けられたものです。それぞれ制作年代と作風が異なり、石山寺の歴史を知るために大変貴重なお像です。

如意輪観音半跏像（旧御前立）
（重要文化財、平安時代）

紫式部像（土佐光起筆）

塑像断片（重要文化財）

初代の御本尊の残された断片

石山寺の初代の本尊は奈良時代に造立されたと考えられる塑像（土の像）で、承暦二年（一〇七八）の火災により崩壊したと伝わります。現在ではその姿を断片でしか知ることができませんが、踏み下げた足先や上膊など、かつての丈六仏を想像するよすがとなる断片も残されています。

<塑像>
粘土で作った像で日本へは唐より伝来し奈良時代に盛んにつくられた。木製の芯に縄などを巻いてその上に粘土を肉付けし表面に金箔や色彩を施したものが多い。

豊浄殿特別展 春季石山寺と紫式部展

紫式部が参籠し『源氏物語』の構想を練ったという伝承が残る石山寺では、春と秋に石山寺の歴史や文化、ゆかりの紫式部と『源氏物語』にちなんだ展示を行っています。

令和二年は天皇陛下の御即位を祝う御開扉の年。これを記念して、春季石山寺と紫式部展では特別展として、観音さまにまつわる仏像や宝物の数々、歴代天皇と石山寺の関わりを示す資料や、宸筆の『源氏物語』などの寺宝を展示いたします。

初代の御本尊の史実 正倉院文書から

奉造埈観世菩薩一軀　高一帖六尺
礒御座
宝字五年十一月十七日奉始
六年七月五日埈了
二月十五日舎利於御身奉入
七月八日奉始
八月十二日彩色了
神王二柱　並礒座
埈并彩色菩薩共奉作了

『正倉院文書』によると、天平宝字五年（七六一）、石山寺の硅灰石の上に作られた礒座（岩座）の上に塑像の丈六観音菩薩像が造像開始されました。石山寺の創建が東大寺と深い関わりを持っていたことは先に述べたとおりですが、東大寺にとって造像の始まった日付や釈迦入滅の日に舎利が込められたことなどが細かに記されており、石山寺の観音造立にかけた人々の思いが今も伝えられています。

胎内仏と聖徳太子の念持仏

石山寺創建の際、良弁僧正が岩の上に祀ったのは聖武天皇から預かった観音像でした。これは聖徳太子の念持仏であったとも伝わり、今回公開する胎内仏のいずれかがそのときの観音像である可能性が高いと考えられています。また、『石山寺縁起絵巻』には、承暦二年（一〇七八）の本堂火災のことが詳しく記されています。絵巻によると、火難を逃れようと僧侶たちが仏像や経典を大急ぎで運び出していたところ、ある観音像が自ら本堂より飛び出し、柳の枝に引っかかっていました。この観音像が胎内仏のいずれかであるとも伝わっています。

石山寺縁起絵巻 巻第四第五段